

2 平成19・20年度の研究より

平成19年度の特別支援教育に関するアンケート調査結果より、「一斉指導の中での個別対応は難しい」「個に応じた教材等の準備をする時間がない」「具体的な対応方法がわからない」等の困難さを感じていることがわかった。

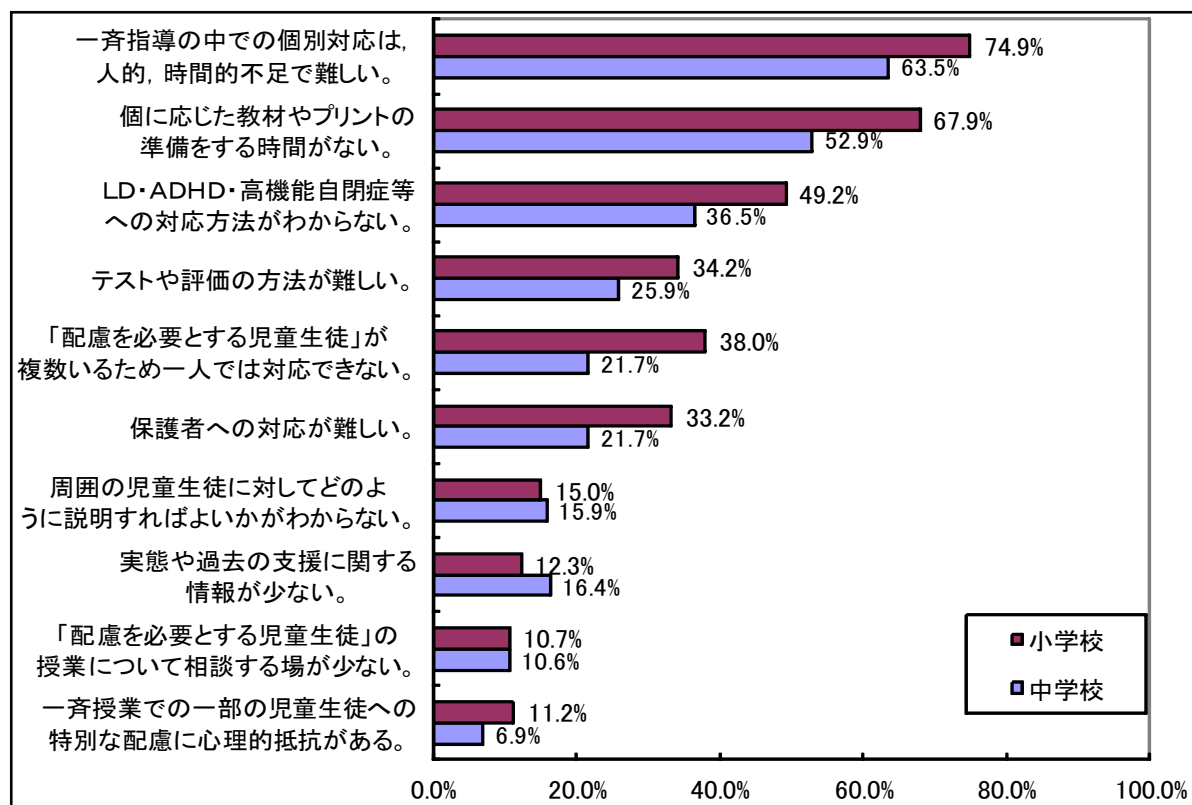


図2 通常の学級の担任(教科担任)が困難さとして感じていることについて
(平成19年度 特別支援教育に関する研究 アンケート調査結果より)

図2では、通常の学級の担任(教科担任)が授業を行う上で、困難さを感じることにについて「とても感じる」と回答した割合の高い順(小・中学校の平均値)を示した。

最も困難さを感じている項目は、「一斉指導の中での個別対応は、人的、時間的不足で難しい」、2番目は「個に応じた教材やプリントの準備をする時間がない」であり、人的、時間的な不足を困難さとして強く感じているという結果であった。また、3番目は「LD・ADHD・高機能自閉症等への対応方法がわからない」であり、障害等の理解についての校内研修等は実施されているものの、授業の中での具体的な対応方法にまでは結び付いていないと考えられる。

そこで、平成19・20年度は、「特別支援教育における授業の実際と評価 ― 多様な教育的ニーズに応じた指導方法の工夫 ―」について、研究を行った。

多様な教育的ニーズに対応するためには、図3に示したように、まず通常の学級において行われている**基本的な授業の計画**の見直しが必要になる。児童生徒の実態に応じて、またその授業のねらいにより、児童生徒にとってつまずきやすいポイント、分かりやすさを高める教材等の工夫を検討する。学力差への対応も配慮し、発展的課題や補充的課題等の複線的な課題を準備し、課題によっては、ティーム・ティーチング、少人数指導、グループ学習等の指導形態の導入について計画を立てることが必要となる。

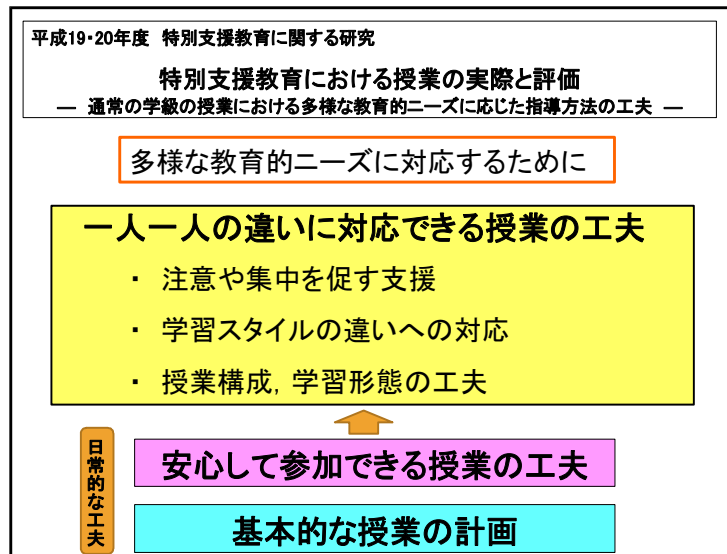


図3 多様な教育的ニーズに対応するために

このように、柔軟かつ多様な指導方法等を可能にしていくためには、学級集団全体が**安心して授業に参加できる雰囲気**であることが基盤となる。様々な学び方が認められる環境や間違えてもよい雰囲気等、一人一人の違いを認め合う集団づくり、分かりやすい学習環境やルールの明示等が大切である。

このような日常的な工夫を基盤として、**一人一人の違いに対応できる授業の工夫**がなされていく。特定の児童生徒に対して有効な個別的な支援だけを考えるのではなく、全ての児童生徒に対して効果的な指導や支援を考えていくことが大切になってくる。授業への注意や集中を促す支援や学習スタイルの違いへの複線的な対応については、このような視点から授業づくりに取り入れていくことができる。一方、個別的な支援を必要とする場合も多くある。児童生徒が理解しやすい学び方や自分にあった課題を選択したり、自力で解決できない課題を教師や友達に質問したりすることができるように、一斉指導の中で個別に対応しやすい授業構成、学習形態を工夫することが大切である。

このように多様な教育的ニーズに対応していくためには、児童生徒がどこでつまずき、どのように指導すれば理解しやすいのかを常に振り返りながら、指導方法を改善していくことが必要になる。その上で一つの単元、1時間の授業の中での評価を形成的評価や児童生徒の自己評価等で確認しながら、柔軟に授業を改善していくことが大切になる。これらの取組は、通常の学級の担任が一人でできることから、校内研修や指導や支援の共通理解など学校全体として取り組むことまでであることを、教師全員が十分に理解し、協力的な支援の実現を目指すことが重要である。

平成19・20年度の研究成果と課題の主なものとして、

- 授業の中で、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の多様な学習スタイル、
つまづき方等に気づき、理解し、教師間で共有していくことが多様な教育的
ニーズに対応する上で有効であること
- 研究成果を更に一般化していくためには、計画的、継続的な授業改善の
取組を実施し、客観的に検証していくこと
- 「基本的な授業の計画と評価」「一人一人の違いに対応した授業の工夫」
については、各教科の専門性に基づいた検証をしていくこと

をあげた。併せて、「**多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト**」を提
案した。なお、平成19・20年度の研究の詳細については、研究報告書を参照され
たい。